

返して、「正しいものの死は快い眠りである」と言っている。「それはこの世の眠りより深いものであるが、肉体に休息を与え、その間に魂は神と交る」というのである。また彼は、「われわれは信仰の力によって死を蔑視し、それを深い強い眠りと見なすようにわれわれ自身を訓練し、また、慣らさなければならぬ」とも言っている。

Horatio の挨拶の二行目の “And flights of angels sing thee to thy rest!” は、古くから葬式の時に用いられてきた祈禱の文句で、16世紀や17世紀初めにも広く行なわれていたものの version である、といえる。それは、“May the angels lead thee into Paradise. . . . May the choir of angels receive thee and with Lazarus, once a beggar, mayst thou have eternal rest” (天使たちがあなたを天国に導かんことを……天使の合唱隊があなたを迎え、そして、且ては乞食であったラザロと共に、あなたが永遠の休息に入れんことを) というのである。

Horatio の言葉を Irving Ribner は Hamlet が salvation を得たことの証拠とみているのであるが、如何なものであろうか。繰り返して述べてきたように、Hamlet の死後の魂のことは、舞台の上には登場させられていないのである。

Hamlet はついに復讐を遂げたが、それは彼自身にも思い掛けないような形で実現した。Laertes との偶然の剣のやりとり、毒杯をそれと知らずして飲む Gertrude、ついに復讐、等々、剣斗の場面の目まぐるしい偶然の出来事の重なり合いは、先の providence 云々の如実な証しとして与えられているようである。先にも解れたように、Hamlet には終始一貫して復讐という血なまぐさい行為への消極的な態度が見られる。復讐という本質的に反キリスト教的な所業の遂行を、真面目なキリスト教徒である主人公が背負わされているところに、この悲劇の深い意味がある、と私には思われるのである。

注1 J. Dover Wilson, *What Happenes in Hamlet*, Cambridge U. P., 1951, pp. 52—60.

2 Irving Ribner, *Patterns in Shakespearian Tragedy*, London, 1962, p. 67.

れるかのように生きなければならない」というふうに言っている。

劇全体の context とその前に続く言葉との関係から見ると、*“Ripeness is all”* は、異教の *Lear* の世界における Edgar にふさわしく、それはせいぜい希望的な宿命論であり、そしてまた、*“readiness is all”* は、キリスト教徒の希望の根拠を宣言する Hamlet の後の性格に適切なものである。何れの場合でも、われわれは、個々の登場人物が舞台の上で置かれているその直接の立場から注意を逸らしてはならないのである。

Hamlet の最後の言葉、*“the rest is silence”* (V. ii. 369) (後は沈黙) は、Robert Stevenson が、これを、死後の生命への希望の決定的な否定である、と述べてから、そのように考えることが一種の流行になった。例えば、H. B. Charlton は、この句を同じように解釈して、「靈魂の不滅への暗黙の否定」としたし、また、George Seibel は、「不可知論者の墓碑銘である」と言っている。

しかし、ここで「沈黙」と Hamlet が言っているのは、実は「死」のことであり、聖書に普通の言い方である(例、「詩篇」115篇17。)*“the special providence”* に委託するようになった Hamlet は、その時、彼の死後への信仰を獲得したのであった。したがって、この Hamlet の言葉は、Shakespeare の同時代人にとっては、前に引続いての摂理への信頼と共に、この世における彼の使命を続けて、言葉によって彼自身の行動の正しさを証明することができないことへの遺憾の念を現わすものとして受け取られたに違いない。20世紀的に解釈すれば不可知論的と思われるのは当然かも知れないが、そのような解釈を Shakespeare の時代にまで遡らせることは、Hamlet の性格を歪めてしまうことになるであろう。

次に Horatio の死んでいく Hamlet に対する挨拶の言葉、*“Good night, sweet prince, / And flights of angels sing thee to thy rest!”* (V. ii. 370-1) (さらば眠りたまえ、やさしい貴公子。そして群る天使の歌に送られて安楽世界に入り給え。) は、どう解釈すべきであろうか。

“Good night” というのは、死を眠りとみる考え方の現れである。Hamlet は例の *‘To be or not to be’* soliloquy で、*“To die, to sleep”*; (III. i. 60) (死ぬるとは、眠ること) と言った。これもまた、先の、死を沈黙とする言葉と同様に不可知論的なものと解釈されてきたが、実は、やはり Biblical な考え方である。そして、16世紀には、死者の蘇えりを期待する休息を意味するものと解釈されていた。これは Luther の好んだ image であって、彼は繰り

Not a whit, we defy augury: there's a special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come: the readiness is all: since no man, of aught he leaves, knows what is't to leave betimes, let be. (V. ii. 230—)

(とんでもないこと、前兆なんか気につけない。一匹の雀が地に落ちるのも神の特別の摂理だ。今来るなら、あとでは来ない。あとで来ないなら、今来るだろう。今来なくとも、いつかは来るのだ。何よりも覚悟が大事だ。死ぬに適切な時期というもの、とうてい現世の知識で知るわけにいかないとするば、まあ、問題にしないでおくさ。)

これらの信仰の表白の真実性には疑問の余地がなく、Hamlet の性格の発展にとって重要な意味を持つものである。そしてその providence 観は Elizabeth 時代の人びとには周知のことであったであろう。例えば Calvin の次の言葉は、Hamlet の立場と非常によく似ているが、それはまた、当時のキリスト教の普遍的な考えを述べているのである。——「神の摂理の光が一度び信心深い人を照したとき、彼はその時救われ、そしてそれまで彼を抑えつけてきた極度の憂慮と不安からばかりでなく、あらゆる心配から解放されるのである。なぜなら、今や彼は怖れなく自己を神に委ねるからである、彼の慰めは、彼の天なる父が、すべてのことをその力に握り、その権威と意志とによって支配し、その英知によって治めているので、神が決めない限り、何事も起り得ないということを知ることである。」

Hamlet は “the readiness is all” (何よりも覚悟が大事だ) と、Horatio に向かって言ったが、全く同じ意味のことを、*King Lear* で、Edgar が父親に伺って、“Ripeness is all” (V. ii. 11) と言っている。しかし Hamlet の場合は context が全く違うのである。それは Shakespeare が Hamlet を、たとい非常に墮落しているとわいえ、キリスト教の社会に置いているばかりでなく、劇全体を通じて、キリスト教徒の態度に、繰返し言及しているからである。Hamlet にとって、“readiness is all” の context は、本質的に、また明白にキリスト教的であり、新約聖書の約束に結び付けられているばかりでなく、それへの信頼の念を要約しているようである。この根柢に基いて、Luther は、「キリスト教徒は死についてあまり大きな関心は払わない」と言っている。Luther によれば、「キリスト教徒は、いつでも死の用意ができていて人のように行動すべきである」と言い、また、Calvin も「われわれはいつも死の覚悟をしていなければならない」とか、「われわれはあらゆる瞬間にこの生から離

的な敘述である、という結論に飛躍することはできない。人間の動物性と神から与えられた理性についての明白な理解を含んでいるとわいえ、ここの独白全体は、復讐、野心、血腥い考えについての執念を示しているからである。Hamlet は彼の後の“special providence in the fall of a sparrow”(V. ii. 231) (雀一羽が落ちるのも神の特別の摂理)への委托からは、まだ遠く隔っているのである。しかし、また、Hamlet には、そもそもの初めから、復讐に対して、何か、消極的な態度が見られる。そして、そのような自己を叱咤激励して強いて、血腥い方向へと駆り立てて行こうとするところがある。

第五幕における Hamlet は、疑問の余地なくキリスト教の providence に委托している信仰の人として性格づけられている。この信仰を Hamlet はイギリスへの航海中に得た。Hamlet はイギリスで彼を待ち受けている死から彼自身の才智によって逃れたばかりでなく、一連の奇蹟的な出来事によって逃れ出た。この時、彼はどのような偶然の出来事にも神の摂理が働いていることを信ずるようになったと思われる。例えば、船の上で Claudius の英国王宛の手紙を発見し、それを書き直して封印をするが、どのようにして封印をしたのかという Horatio の問に対して、“Why, even in that was heaven ordinant”(V. ii. 48) (いや、実はそこにも神の力が表われていたんだ)と答えているのを見ても明らかである。また、彼は Horatio に向って、その新しく得た信仰を次のようにはっきりと述べている。

Rashly,

And praised be rashness for it, let us know,
Our indiscretion sometimes serves us well,
When our deep plots do pall: and that should teach us
There's a divinity that shapes our ends,
Rough-hew them how will, (V. ii. 6-11)

(その時無鉄砲に、そして無鉄砲もこうなると有難い。実際深い企みがしくじるような場合に、時には無分別が立派に役立つものだ。そして、それから考えても、荒削りは人間がどんなにしようと、とどの仕上げは、神業ということが分る、——)

また Laertes との試合の前に Hamlet が感ずる不吉な予感に従うようにとの Horatio の忠告に答えて Hamlet は、次の有名な科白を語る。

Claudius から英国行を命ぜられて行く途中、Fortinbras の軍勢に出会ったとき、Hamlet は、“How all occasions do inform against me, and spur my dull revenge”（折に触れ事につけ、何と万事がおれを非難して、鈍った復讐心を激励することだろう。）に始まる有名な独白を行うが、上の文句に引続いて彼の言う次の言葉は、著しくキリスト教的である。

What is a man,
If his chief good and market of his time
Be but to sleep and feed? A beast, no more.
Sure, he that made us with such large discourse,
Looking before and after, gave us not
That capability and god-like reason
To fust in us unus'd? (IV. iv. 33-9)

（人間とは何か。もし眠って食うほかに、いっこう大したこともせず、空しく時を費すなら？禽獣に過ぎない。神が人間を造り、広く物の道理を考え、前後に眼を配って物を考える大きな力を授け給うたのは、その能力、神さながらの理性を役にも立たせず黷させるためでないことは明かだ。）

Hooker も、「卑しい欲望が、その肉体と同様に死を免かれず、腐敗する野獣の魂に似ているとは驚くべきことではないか」と問うている。人間は神に似た性質を持っていると共に、たやすく自分自身を野獣の水準にまで引き下げることができる。彼が野獣と異なるのは、Hamlet が言うように“discourse of reason” (I. ii. 149) (理性の力) を与えられているからである。Calvin が「人間はただ生命を持っていて飲み食いができるばかりでなく、彼等はまた悟性と理性を持っている」と言うとき、同じような意味のことを言っているのである。また Calvin は、Hamlet の言葉“large discourse, Looking before and after”と同じような意味のことを、「天地や自然の秘密を見、そして悟性と記憶によってあらゆる時代を理解する人間の鋭敏な心は、すべてのものを秩序正しく会得し、そして過去の出来事によって未来を推量する」と言っている。また Luther の、「神は確かにわれわれの理性とその忠告や援助を、われわれがそれを軽蔑し、無視せんがために与えたのではなかった」という言葉は、Hamlet の「神は、神さながらの理性を、役にも立たせず黷させるために与えたのではない」という言葉と一致するものである。このようにして Hamlet の人間についての言葉は、キリスト教の教義に全く一致している。しかし、だからといって、Fortinbras の軍勢を見ての Hamlet の独白全体がキリスト教

Confess yourself to heaven ;
Repent what's past ; avoid what is to come. (III. iv. 149-50)
(神様に懺悔をなさい。過去を悔い改めなさい。将来をお慎みなさい。)

母との対面中 Claudius と思い誤って polonius を arras 越しに刺し殺してしまうが、このことについて Hamlet は、

For this same lord,
I do repent : but heaven hath pleased it so,
To punish me with this and this with me,
That I must be their scourge and minister. (III. iv. 117-5)
(この人に対しては私は後悔しています。しかし神様の思召は、この男によって私を罰し、また私によってこの男を罰することなので、私は天のしもとにもしもべにもなる必要があったのです。)

というが、この scourge and minister という言葉は、Hamlet を宗教的に見ようとする人びとによってよく問題にされてきた。(例えば、G. R. Elliot, *Scourge and Minister*, Durham, N. C., 1951 ; Irving Ribner, *Patterns in Shakespearian Tragedy*, London, 1962)

Irving Ribner によると、「Hamlet は神によって悪の懲戒者として選び出されたものであり、Elizabeth 時代人は、そのような目的のために神は彼を scourge か或は minister として用いる、ということを知っていた。scourge というのは Richard III のように、私的な復讐を行うものであり、神の敵を滅すことによって彼自身の魂を墮獄せしめる。minister というのは、Henry of Richmond のように公的な正義を逐行しながら、彼の滅す悪によっては傷付けられないものである。Hamlet が scourge か、或は minister のどちらとして行動するか、ということはこの劇の決定的な問題である」² と言っている。Ribner はもちろん Hamlet を minister として見ているのである。彼はこの劇をまさしく宗教劇として捉えており、彼にとっては Hamlet の salvation ということが重大な課題になっている。しかし Hamlet の死後の運命を論ずるということは、この劇の舞台から逸脱することである。問題は、生きている Hamlet 自身が際立ってキリスト教徒的な言動をするということの意味なのである。

人が自己の最も深い所を鏡にかけて見るように見る，というのは Elizabeth 時代の人びとにとっては馴染み深いことであつたであろう。道德の法則がよくこのような言い方で述べられたし，また Elizabeth 時代人は，この法則との関係において自己自身を判断するやうにと教えられていたからである。Calvin の次の言葉はその点で代表的なものである，「法則は鏡のようなものである。その中にわれわれはわれわれの弱点，これから起る悪，そして最後に両者から生じる呪いを，ちょうど鏡がわれわれの顔の上の斑点を見せてくれるやうに熟視するのである。」Hamlet が掲げる鏡に照されて，Gertrude はついに“black and grained spots”（真っ黒に染みついた汚点）を見出す。

O Hamlet, speak no more!
Thou turns't mine eyes into my very soul,
And here I see such black and grained spots
As will not leave their tinct. (III. iv. 88-91)

（ああ，ハムレット，もう何も言わずにおくれ。お前のために私は自分の心の奥底を見せつけられ，そこにどんなにしても色の落ちない真黒に染みついた汚点のあることが分つた。）

また Hamlet の

Mother, for love of grace,
Lay not that flattering unction to your soul,
That not your trespass but my madness speaks;
It will but skin and film the ulcerous place,
Whiles rank corruption, mining all within,
Infects unseen. (III. iv. 144-9)

（お母さん，どうか後生ですからそんな気休めの膏薬で自分の心をごまかして，あなたの罪ではなく，私の狂気がものを言うと思わないで下さい。そんなごまかしは，ただ潰瘍に薄皮を覆うだけで，中は烈しい毒が到る処に食い行って，見えずに腐って行くのです。）

という言葉は，極めてキリスト教的である。Hamlet の目的は，Gertrude へ訴えかけることによって，Claudius との斗いにおいて彼女を自分の味方に獲ち取ろうとすることばかりでなく，また彼女がその罪を認めるやうにと導くことであり，また懺悔と改心というキリスト教徒の行いに従わせることであつた。

は害を加えるような企ては何もしないようにと警告していた。

leave her to heaven

And to those thorns that in her bosom lodge

To prick and sting her. (I. v. 86-8)

(母は天に任せ、またその胸に刺さっている良心の棘があれの心を苦しめ悩ますのに任すがよい。)

このような良心の棘は、神が罪人に働きかける多くの罰の一つである。ところが Gertrude は Hamlet が鏡の中に彼女自身の真の姿を写し出して見せるまでは、良心の苛責を全然感じていないようである。Hamlet は母の許へ行く前に、たとえ厳しい真実は語っても、親切な態度で彼女に接しようと思う。

I will speak daggers to her, but use none ;

My tongue and soul in this be hypocrites ;

How in my words soever she be shent,

To give them seals never, my soul, consent ! (III. ii. 414-17)

(言葉では母を刺しても、剣では刺すまい。そこに舌と心とを表裏させよう。言葉の上ではどれほど母を責めようとも、わが心よ、決して言葉を実行に移すな。)

この態度は Luther が忠告しているキリスト教徒の譴責にふさわしいものである。即ち彼は、「あなたは人の心の傷に触れるとき、それを和らげ、癒してやるようにしてやらなければいけない。あなたは厳格であってもいいが、親切心を忘れないようにしなければいけない」と言っている。

さて、Gertrude は、例えば Lady Macbeth のように積極的に悪なのではない。彼女はむしろ彼女自身の盲目的自己認識の犠牲なのである。即ち Luther が言っているように、「人間性の腐敗と盲目とは非常に大きいので、自分の罪の大きさが見えないし、また、感じもしない」のである。このような状態にある母親に向って Hamlet は言う。

You go not till I set up a glass

Where you may see the inmost part of you. (III. iv. 19-20)

(じっとしていられ、あなたの心の奥底まで見える鏡を出して上げますから。)

呼びかけを示しているのではなくて、むしろ憂慮の徴候なのであり、それが極端に走れば、悪人の心の平安を破壊してしまう」と述べている。

Claudius が悔い改めることのできない所以は、更に他の二つの要素に基いている。即ち、彼は、彼の過去の罪を斥けようとはしないし、また、将来の罪からも引き返そうとはしていないからである。彼は兄殺しによって得た利益を元へ返したくないばかりでなく、いま彼は甥の暗殺を企んでさえいるからである。彼の心には、Hamlet を片付けようとする彼の企てが、彼のしようと努める悔い改めに相反しているという考えさえ浮んでこないようにみえる。しかし彼は悔い改めが償いなしには空しいものであろう、ということによく承知している。

My fault is past. But, o, what form of prayer
Can serve my turn?
'Forgive me my foul murder'?
That cannot be; since I am still possess'd
Of those effects for which I did the murder —
My crown, mine own ambition, and my queen.
May one be pardon'd and retain th'offence?

(III. iii. 51-6)

(わしの罪は過去のものだ。しかしまあ、どういう祈禱がわしの目的に適うのか知らず、「わが兇悪なる殺人の罪を赦し給え」か？これではいけない。その殺害によって得た利益、宿願とした王冠とあの王妃とを尚自分のものとしていては。罪の結果を所持しながら、罪の赦しが得られるか？)

Frye は、当時の神学の consensus がこの独白よりも適切に要約されることはできないであろう、と言う。例えば、Hookerは、「人は自分自身の利益のために他を犯したならば、この場合何にもまして要求されることは償いである」と言っている。同様に Calvin も、「償いなしには罪人の懺悔は架空のものにすぎない、なぜなら偽善者は自分が不正に手に入れたものを正直に返却しようとしなくて、神と和解することに空しく奔命しているからである」と述べている。

このような理由から Claudius は悔い改めることができない。彼は罪の根を引き抜こうとはしないで、罪の穢れを除き去ろうと努めている。Calvin は、「原因が残っているのに結果を除き去ろうとするのは馬鹿気たことである」と言っている。

このようにして Hamlet は Claudius の外見に欺むかれて復讐の好機を逸し、母の寝室へ向うのであるが、亡霊は初め Hamlet に向って、母に対して

を下す。

Whereto serves mercy

But to confront the visage of offence?

And what's in prayer but this twofold force,

To be forestalled ere we came to fall,

Or pardon's being down? Then I will look up. (III. iii. 46-50)

(真つ向から罪をうち退けるのが、結局慈悲の功德ではないか?そして祈禱とは、人間の墮落を前以て防ぐか、それともいつたん墮落したものを許すか結局その二様の力を持っているのではないか?では、わしも天を見よう。)

Claudius はこのように考えて Hooker のいわゆる第一の過ちは避けることができたが、彼は第二の過ちに陥入ってしまう。なぜなら、彼の悔い改めは、彼自身の言うとおりに非常に不完全なものであるからである。

Try what repentance can. What can it not?

Yet what can it when one cannot repent? (III. iii. 65-6)

(悔い改めの力で何とかしよう。どんな罪でも消える筈だ。とわいえ、悔い改める心が起らなければ、それがいったい何の役に立つか?)

Frye によると Luther は、「われわれの罪の単なる悔恨は、まことの悔い改めではない。われわれの悔い改めには、神の約束へのまことの信仰が付け加わってなければならぬ」と言っているし、また Hooker も「祈るものには必ず信ずることが要求される」と書いている。ところが Claudius は、どの点からみても、彼に対する神の慈悲への生き生きとした信仰、或は信頼の念を示してはいない。彼はその祈ろうとする試みが失敗に終わったことを自分自身ではっきり認めている。

My words fly up, my thoughts remain below.

Words without thoughts never to heaven go. (III. iii. 97-8)

(言葉は飛び上っても、心は地についている。心のこもらない言葉は、とうてい天へは達しない。)

そのような効果のない祈りについて、Calvinは、「それは真実の改心や神への

ものだ。)

これは、コリント後書11章14節の“for Satan himself is transformed into an angel of light” (サタンも己れを光の御使によそおえば) の echo である。

亡霊の正体が掴めないうちに亡霊の復讐の命令に簡単に従うことはできない。これがいわゆる delay の主な理由であることに疑問の余地はない。たまたま Elsinore にやってきた俳優の一座を利用して劇を演じさせ、Claudius 王の良心を試そうとする。手応えは確かにあった。そして母から呼ばれて行く途中、ひとりで跪いて祈っている Claudius 王に出会す。復讐の好機とばかり、剣を抜いて背後に迫って行くが、いま殺したのでは彼を天国へ追いやることになって復讐にはならないと思ひ返して、剣をまた鞘に納めて通り過ぎてしまう。しかし、この時の Claudius 王の心の中の状態が、天国へ行くのにふさわしいものでなかったことは、彼自身の独白によって明かである。

この Claudius の独白における repentance, 即ち悔い改めの取り扱い方は、イギリス文学のうちでも最も興味深いものの一つである、と Frye は言う。そして、Shakespeare は、その独白の短い棒の中に、悔い改めに関する神学の基本的要素の大部分が含まれるほどの非常に広い範囲にわたる事柄に触れている、と指摘している。

さて、Claudius は、彼自身の罪、悔い改めようとする望み、そしてまた、罪によって得たものを元へ返したくない自分の気持と闘う。殆んど絶望に瀕して彼は自問自答して、「悔い改める心が起らなければ、それがいったい何の役に立つか」という。

Frye によれば、Hooker は、まことの悔い改めに達することの困難を分析して、ある人びとは「彼等の罪がとても許されないほど大きいので、どんな悔い改めも彼等には何の役にも立たないのではないか、と怖れ、またあるものは、不完全な悔い改めしかしないので罪を除き去ることができない」と言っている。

Claudius はこれら二つの可能性について考え、先づ第一のものから始める。

What if this cursed hand
Were thicker than itself with brother's blood
Is there not rain enough in the sweet heavens
To wash it white as snow? (III. iii. 43-6)

(仮にこの呪わしい手が太くなるくらい兄の血に染まっているとして、それを雪のように白く洗う雨が、あの有難い天にはないかしら。)

だが、彼は直ぐに自分の罪が必ずしも許され得ないものではない、との結論

Hamlet の 宗 教 性

小 島 信 之

Hamlet にはキリスト教の色彩が案外濃厚にあって、このことを除外しては、この劇全体の理解を妨げるのではないか、と思われる程である。しかし、これは何も Shakespeare が彼自身の特定の信条を語るために *Hamlet* を書いた、ということではない。その source と同じく、宗教的な事柄も、劇作のために、いわば利用されているのであって、その点が、Shakespeare の、Dante や Milton や Bunyan と異るところである。したがって、ここでは *Hamlet* を宗教劇として取り扱うのではない。また、Shakespeare 自身の宗教も、形の上では the Church of England に属していたけれども、それが果して何であったか、ということになると、よく分らないというのが実情である。しかし、Roland Frye の *Shakespeare and Christian Doctrine* (Princeton, 1963) によると、Shakespeare は当時の神学について良く知っていて、それを作品のなかにたくさん取入れている、という。Frye は16世紀の数多くの神学者の中から、特に Martin Luther, John Calvin, Richard Hooker の3人を選んでいゝる。*Hamlet* の場合、当時の宗教や神学がその上にどのように反映しているかを、Frye その他を手懸りにして調べてみたいと思うのである。

先づ亡霊であるが、Dover Wilson も指摘しているように¹、これが煉獄から来た Catholic の亡霊であることは、亡霊自身の言葉によって明瞭である。しかし、Martin Luther で有名になった Wittenberg 大学で教育を受けた Hamlet は、後になって、それは悪魔が彼の弱気と憂鬱に付け込んで、美しい姿を取って自分を地獄へ曳きずり込もうとしているのではないか、と疑い出す。Protestant は煉獄を認めないからである。

The spirit that I have seen

May be the devil : and the devil hath power

T'assume a pleasing shape ; (II. ii. 635-7)

(おれの見た亡霊は悪魔かも知れない、また悪魔には見かけのよい姿を装う力がある)